

院政期の漢詩世界序説（一）——『本朝無題詩』の時代へ——

本 間 洋 一

一 寛弘聖世

それは長久二年（一〇四一）も明けて間もない正月一日午の刻頃のことであつたという。和漢の才識冠絶にして詞人才子の宗師とも仰がれた藤原公任（九六六—一〇四一）は、十日間程瘡湿を患い臥っていたが、遂にこの日七十六歳の生涯を終えた。^①万寿元年（一〇二四）師走、父祖の遺塵空しく三台に昇ることも叶わず、失意のうちに致仕してより洛北の長谷^{ながたに}（左京区岩倉）に幽居。同三年正月、解脱寺にて出家した後は念仏に日々を送っていたとも伝えられている。^②恐らく彼の長い生涯の中でも活躍の盛栄期と言えば、円融朝（九六九—八七）以降、殊に一条帝世（九八六—一〇一一）にかけてと言つて差支えなからう。

一条朝は今日の文学史では、紫式部・清少納言らが出て女流文学の百花繚乱というイメージが強いが、それはあくまで一面に過ぎず、この期が実は漢詩文の隆盛期でもあつたことは、^③一部の研究者はともかく、今猶一般的には知られていないのではなからうか。当代に詩書の才を以て知られた藤原行成（九七二—一〇二七、権大納言・正二

位)は今上(一条天皇)の名君ぶりを次のように称揚している。

主上は寛仁の君にして、天曆以後の好文の賢皇なり。万機の餘閑に、只に叡慮を廻したまふ。期する所は澄清なり、庶幾ふ所は漢の文帝・唐の太宗の旧跡なり。(『権記』長保二年(一〇〇〇)六月二十日⁽⁴⁾)

更に属文の才に優れた中書王具平親王(九六四—一〇〇九)も、御製詩を拜読し、「漢帝の文花、唐帝の筆」も「詩帝兼容す、草聖の情」をお持ちの今上には劣り、「德輝世を照ら」す恵み深い治世を築いておられると絶賛する。そして、これは全くの歴史の偶然という他ないのだが、公任没年に呱呱の声を挙げ、後に院政期を代表する碩儒として偉才を発揮する大江匡房(一〇四—一一一一)もまた次のように帝の才学とその治世に対する賛嘆の筆を惜しまない。

御宇廿五年の間、叡哲欽明にして、広く万事に長じたまふ。才学文章は、詞花人に過ぎ、糸竹絃歌は、音曲絶倫なりき。年始めて十一にして円融院に幸し、自ら竜笛を吹き、以て宸遊に備へたまふ。佳句既に多く、悉く人口に在り。時の人を得たるや、斯において盛んなりと為す。

(『続本朝往生伝』「一条天皇」)

そして、何よりこの好文の帝世には、諸資料に依つて夥しい数の詩宴(作文会)が催されていたことが知られる。遺憾ながら今日ではその作品の多くが既に亡佚してしまつたが、それでも猶、『本朝麗藻』(高階積善撰。寛弘七年(一〇一〇)秋以降の成立か)『本朝文粹』といった詩文集や、『新撰朗詠集』『類題古詩』(一般的には『類聚句題抄』として知られている)『江談抄』等の佳句選・説話書に依り、当時の属文の才子達がいかにその藻美を競つたかが伺い知られる。因みに、先ずはかの天皇の代表的作品を挙げてみることにしよう。

書中有_二往事_一

一条天皇

閑就典墳送日裡⁽⁸⁾

閑かに典墳に就いて日を送る裡に⁽⁹⁾

其中往事染心情

其の中の往事 心情に染む

百王勝躅開篇見

百王の勝躅 篇を開けば見れあらは（篇を開いて見）

万代聖賢展卷明

万代の聖賢 卷を展のぶれば明らかなり

学得遠追虞帝化

学び得ては 遠く虞帝の化を追ひ

読来更恥漢文名

読み来りては 更に漢文の名に恥ぢたり

多年稽古属儒墨

多年の稽古 儒墨に属すれば

縁底此時不泰平

底なに縁よりてか 此の時 泰平ならざる

（『本朝麗藻』卷下・102）

（通釈）心静かに書物を読み日々を送っていると、先人の故事が心にしみて思われてならぬ。書物を開けば帝王達のすぐれた治績が見え、卷子を展べると代々の聖賢の所行も明らかに記し留められている。それらをしてかと学んで、理想とも言うべき虞帝の治政（無為の化）を追慕する一方、読むにつれ仁孝厚き漢の文帝の名声を前にわが身を恥ずかしく思うばかりである。自分はかくして歴史を学び、仁と兼愛（博愛平等）の精神を身に帯してきたから、一体どうしてわが治世が泰平にならぬことがあるうか。

この作品については、林鶯峰の「居九五之貴、有志于文字、不亦善乎。此時政無大小、決于道長。末句其有寓勸慮乎」（『本朝一人一首』卷五・217）という鋭い洞察もあつてなかなか興味深いが、学問を愛する属文の賢皇としての真摯な姿勢は、前掲の人物評や説話とも一致して、聖世の主にあふましいイメージを強く読み手に伝えずにはおかない。次いで、冒頭で触れた公任の作も挙げてみよう。

晴後山川清

藤原公任

山霽川清景趣幽

山霽はれ 川清らかに 景趣ふか幽く

近望雨脚対東流

近く雨脚を望んで 東流に対す

嶺模毛女唯青黛

嶺は毛女を模して 唯だ青黛

浪伴漁翁自白頭

波は漁翁を伴ひ 自らに白頭

雲霧靄収松月曙

雲霧の靄収まる 松月の曙

菰蒲煙卷水風秋

菰蒲の煙卷く 水風の秋

云仁云智足相楽

仁と云ひ智と云ひ 相楽しむに足る

宜矣登臨促勝遊

宜なるかな 登臨して勝遊を促せるは

〔『本朝麗藻』 卷下・57〕

(通釈) 山は晴れ渡り、川も清らかに流れて、景情味わい深いものがあり、間近に糸筋の如き雨を眺めつつ、東の宇治川の流れに向かい合っている。嶺の色はかの毛女(『列女伝』に見える仙女)の黛そのままにただ青々と澄み、川の波もあの漁父(『蒙求』漁父江泛、『楚辞』「漁父」)の白毛頭のように白く清らかである。山にかかる雲や霧といったモヤが収まると、松にかかる月も澄みきって明け方の明るさをたたえるようであり、また、マコモやガマの生える川辺にたち籠めるモヤが消えると、水辺の風は澄みきった秋のごときすがすがしさを感じさせてくれる。この宇治の山や川は十分楽しむに足るものであり、なる程さればこそ、左丞相(道長)殿は山に登り川を渡りする楽しい遊覧をせかされたわけですね。

これは長保五年(一〇〇三)五月、藤原道長(九六六—一〇二七)の宇治別業での作。宇治は、当時都の貴族達の別荘地として知られ、道長もしばしば伴を連れ訪れていたが、この時も他に、藤原齊信(九六七—一〇三五)・隆家(九七九—一〇四四)・行成・有国(九四三—一〇一一)・源俊賢(九五九—一〇二七)・大江以言(九五五—一〇一〇)・善滋為政(?—九九七—一〇二九?)といった才子達を同道。到着後には詩歌管絃の遊びが行われて

いる。⁽⁹⁾ 宇治行は佳節の文芸的遊樂の重要な機会にもなっていたわけであるが、ところでこの詩に対する後世の評価は必ずしも芳しくない。就中、江村北海（一七一三—一七八八）の「若夫題『山川晴景』七律、稚拙不成章」（『日本詩史』卷一）という酷評は、和漢兼才の伝説的才人とされている公任像を強く揺ぶらずにはおかないであろう、公任は果たして優れた詩人たりえたのだろうか。今の稿者にその当否について説得力ある論を展開する能力があるとは思えないが、ただこの当時の漢詩の詠法的一端についてであれば聊か述べることは可能かと思うので、以下に記してみたい。

二 句題詩詠——表現の特質——

この頃の漢詩の中心は七言律詩の句題詩詠であった。その句題詩の詠法については嘗て論じたこともあるので、⁽¹⁰⁾ ここでは簡単に触れるに留めるが……先ず、五言（稀に七言のこともある）一句を詩題とする。そして、首聯の二句にその句題の五文字を詠み込み、句題（から喚起される想念など）の趣意をわかり易く説明する。次の領・頸聯では、句題の五文字を用いずに、その題の趣旨や意味内容を、具体例や比喻・故事等を用いて繰返し敷衍して表現し、最後の尾聯では一詩を成した心情・感懷などを述べてしめくくるというものであった。当時の作品の中でも、その様式の最もよく整った典型的作品として高く評価されてしかるべきものを次に掲げてみたい。その作者は、先の公任の宿敵とも取沙汰される人物で、父兼家が己の子達に比べ多才な公任を羨んだと聞き、その「影をば踏まず、面をや踏まぬ」（『大鏡』人巻・太政大臣道長）と豪語したと伝えられる藤原道長である。実は彼は当世の文壇のパトロン的存在であったこともよく知られている。

林花落灑_レ舟

藤原道長

花落林間枝漸空
 多看漠々灑舟紅
 夜維桃浦飄紅雨
 春艤柳堤送絮風
 范蠡泊迷霞乱処
 子猷行過雪飛中
 更耽濃艷暫停棹
 興引鎮為吟詠翁

花は林間に落ちて 枝漸く空し
 多漠々として舟に灑く紅を看るのみ
 夜 桃浦に維ぐに 紅雨飄き
 春 柳堤に艤ふに 絮風送る
 范蠡も泊り迷はん 霞の乱るる処に
 子猷も行き過ぎん 雪の飛ぶ中に
 更ねて濃やかなる艷を耽まんと 暫し棹を停むれば
 興に引かれて 鎮しなへに吟詠する翁と為れり

『本朝麗藻』卷上・5

(通釈) 花が林の中で散って木々の枝も空しくなろうかという折、私はただはらはらと舟に降りかかるばかりの花片を見守る。すると、夜に舟を桃花咲く入江に繋ぎ留めた時に、まるで花片が紅色の雨のように空に舞う風情が思いやられ、また、春に柳の植えられた堤で舟を出す用意をしていて、風が白い絮を送り来るといふイメージが浮かんでくる。このように、空の赤く焼けた色の如き桃花乱れ散る中にあるのは、あの名高い范蠡(『蒙求』范蠡泛湖)もきつとどこに舟を寄せたものかと戸惑うことだろうし、こんなに雪さながらに柳の絮が美しく飛び交う中では、あの風流人の王子猷(『蒙求』子猷尋戴)もさぞかし舟を寄せるべき波止場を行き過ごしてしまうのでは、と思いやられてならない。かくして私はさらにこまやかな花の美しさを楽しむべく、しばし棹をとどめたところ、いつの間にやら花下の興に誘われて、久しく詩句を吟詠し続ける翁となっていたことである。

先ずはこの作が五字の句題の題意を豊かに展開させ、巧みに映像を喚起させている手法に注目すべきであろう。首

聯では作者は林中の花片が散落して舟に降り注ぐ景を見つめている（尤もこれ自体が仮構されたものであることもありうるが）。すると眼前の景が薄らいで次第に別の世界が立現われる。頷聯は、先ず舟の繋かれた桃花咲く入江であり、そこでは紅い雨のように花片が舞う。次いで柳の堤で出発の準備をしている舟に、柳絮が飛び交う景。句題中の「林花」を桃と柳に描き分け、その美しさを「紅雨」「柳絮」で表現するのみならず、上四字は題中の「舟」に関わる措辞を採っている。そして、頸聯では更にシーンが変転して、范蠡が夕焼けの中でどこに舟を着けるべきか迷う姿、更に王子猷が降りしきる雪の中で友人（戴逵）の家を通り過ぎようとしている様が、さながら映画のシーンのように作者の脳裏に浮んでは消える。用いられる「霞」や「雪」は前聯で示された桃花と柳絮の譬喩に他ならず、句題中の「林花」を反映させているもの。そして、「范蠡」「子猷」はいずれも「舟」に関わる故事で、それをふまえての援用に他ならず、巧緻な構成と措辞が感受されようかと思う。こうして句題の五言一句は詩人によって具体的に形象化され、時に拡張・増幅されて、幻想的唯美的世界が構築されることになる。この時代はまさにこのような詩が志向されるべきものであったと考えるが、従って頷・頸聯の対句構成は勿論のこと、適切な譬喩や故事等を用いてどれ程印象深い表現が達成できるか、その点が評価のポイントになったであろうかと臆測される。

ところで、譬喩などを用いた映像性豊かな詠詩は、勿論道長の作やその時代に発したものではない。こうした傾向が本朝詩で顕著に伺えるようになるのは、管見に依れば恐らく九世紀後半以降——即ち島田忠臣（八二八—八九二）・菅原道真（八四五—九〇三）の時代——ではないかと思われる。因みにその頃の作品の一例を次に掲げてみたい。

賦^三雨中桜花^①

島田忠臣

桜開何事道無倫

桜開^さく 何事^{なん}ぞ道^いふ 倫^{たぐひ}無しと

半是雲膚陶染頻

なかば 半は是れ雲膚にして 陶染頻りなり

低入潦中江濯錦	低れて潦中に入りては 江錦を濯 <small>あら</small> ひ
暖霑枝上火燒薪	暖かに枝上を霑 <small>ぬ</small> らしては 火薪 <small>たきぎ</small> を焼く
吳娃洗浴顏脂沢	吳娃洗浴して 顔に脂沢あり
蛇女清談口唾津	蛇女清談して 口に唾津あり
東閣經年為老樹	東閣に年を経て 老樹と為 <small>な</small> り
縱雖顛顚可誇春	縱 <small>たと</small> ひ顛顚 <small>せうすい</small> すと雖も 春に誇るべし

〔田氏家集〕卷下・149

(通釈) 桜が咲くと、人々は何故類無きものとその美をほめそやすのだろうか。その花の半ばは雲の膚はだえの如くで、雨にぬれると色を頻りに染めかえるようにも見える。雨の中で桜の花房が低れて潦水にわたづみに入ると、その流れはまるで蜀江で錦を濯すすぐかと思われる美しさ。また、雨の中で桜が枝上に暖かそうに花房を濡らしていると、それはまるで火が薪を燃やしているかのようだ。或は、雨に濡れる桜は、吳の美人が湯あみして、顔につややかな光沢を帯びているかのようであり、また、美女のけがれなき語らいに潤う唇の如き美しさだ。丞相(基経)様の御宅に三十年の歳月を経てこのような老木となったのだが、たといやつれ衰えようと、春毎にこのように変わらず誇らかに咲いてくれよ。

尾聯の老木にはつい忠臣自身の姿をオーバーラップさせてしまうが、⁽¹²⁾ともあれ、この作品を先の道長の作品に比べてみると(句題詩ではないから題字を殆ど詠込まないことは当然なのだが)、表現の手法自体は極めて近似していると言えないだろうか。首聯では先ず桜花の色が雨中に微妙に変化する様子に注目することを提示し、頷聯ではそれを蜀江で濯(13)がれる錦や燃える火に喩える。この譬喩そのものは恐らく今日の人の一般的視点からは聊か突飛に過ぎよう。桜のように淡い色調のものが強烈な色彩インパクトを持つ蜀錦や火に譬えられるという文学的誇張は、更

に次聯にも及んで、呉娃（呉地方の美人）の湯上がり肌の色つや、美少女の語らう口元、濡れた唇に重ねられる。作者の眼は確かに雨中に咲く桜花に注がれているはずなのだが、その視線の先には現実の景を突きぬけて、幻想的な美的想念の世界が次々に展開されているわけである。それには勿論、語彙のみならず奇抜な譬喩——これはあくまで現代的リアリズムに馴れた者の視点に他ならないが——が大きく作用していることは誰にでも感得されることだろう。

もつとも、現前の景に心中触発され、次第に想念の世界に遊ぶ趣向そのものは、王朝詩人達が親しんだ中国古典詩にもしばしば見受けられるものであって、特別なものではない。⁽¹⁴⁾ 詩人の営みとは先人の抒情に共振すると共に、その心内に新たな抒情の発見を重ねてゆくものでもあったはずだからである。

九月十三夜

藤原忠通

閑窓寂々月相臨

閑窓寂々として 月相臨む

従属窮秋望叵禁

窮秋に属きて従り 望禁へ^{がた}叵し

潘室昔蹤凌雪訪

潘室の昔の蹤を 雪を凌いで訪^とひ

蔣家旧径踏霜尋

蔣家の旧^{ふる}き径^{こみち}を 霜を踏んで尋ねん

十三夜影勝於古

十三夜の影は 古^{いにしえ}に勝^{まさ}り

数百年光不若今

数百年の光も 今^{けふ}に若^しかざらん

独憑前軒廻首見

独り前なる軒^{のき}に憑^より 首^{かうべ}を廻らし見れば

清明此夕価千金

清明^{さやけ}き此夕^{こよひ}は 価^{あたひ}千金

（通釈）物静かな窓辺で九月十三夜の月を眺めていると、秋も終わりの景とてたえ難い思いにかられてならぬ。

こうしていると、「悼亡詩」(妻の死を悲しむ作で『文選』『玉台新詠集』にも所収)に「皎々窓中月、照我室南端」と詠んだ潘岳の故宅を雪(月光の譬えでもある)の降り積もる中訪れ、或は、三逕の故事で知られる蔣詡(『蒙求』蔣詡三逕)の家の小道を霜(月光の譬えでもある)を踏んで尋ねたい思いにかられる。十三夜の月の光は昔日に勝って輝き、この先数百年の月とて今宵には及ぶまい。かくて一人軒先に身をもたれつつ、眼前の景を見やれば、清くさやけき今宵こそ価千金の感がある。

第一句の「閑窓寂々」たる下で「秋月」を眺める現実の己は、やがて頷聯で新たな想念の世界に誘われる。「潘室」「蔣家」は「閑窓寂々」たる場を示し、「雪」「霜」は月光から惹起された譬喩として詠み分けられているから、前述した句題詠の展開の手法にも類似しているか。それはともあれ、通釈で示した通り、潘岳の故事は「月」に関わる故事であるから作者がここに用いるのはもつともなことで首肯できる。が、後者の蔣詡の故事は実は本来「月」とは必ずしも直結しないものである。⁽¹⁵⁾ なのにこのように詠まれる根拠はどこにあるのかと言え、それは恐らく背景に「明月好同三逕夜、緑楊宜作両家春」(欲与三元八卜⁽¹⁶⁾隣先有是贈)『白氏文集』卷十五・0812)の白詩句を意識した可能性が大きい。忠通はそれを自明のこととして踏襲したものと思われる。つまり、白詩句は「三逕」の故事と明月を結びつける回路としての役割を果たしているのである。そしてこうしたことは、忠通という詩人固有の傾向というよりは、むしろ王朝漢詩の多くがこのような表現層の中にあると言って良いのではないかと思われる。故事の援用や先行の措辞・表現の襲用こそが、王朝詩人達の美の発見や抒情表現の創造に欠かせない手法であったことは改めて説くまでもないが、稿者は唐土の表現の享受のみを殊更に言い立てたいわけではない。例えば、前掲忠通詩では、恐らく唐渡りの(本朝でも菅原道真の時代以後殊に詠まれるようになる)八月十五夜詠を念頭に置きつつ、本朝独自の九月十三夜詠という新たな素材、佳節の獲得を頷聯で強く主張していることにも一瞥をくれておきたいし、本詩の如き表現が周辺の仮名文学の表現——例えば和歌の「本説」「本歌取り」など——にも

示唆を与えるものになっているのではないかと思われてならないのである。

三 追慕憧憬

さて、一条聖世の文壇の精華として『本朝麗藻』のあることは既に先に触れたところだが、彼の書には貴顕より受領層に至る当時の文人達二十九名¹⁸⁾の作品が見えている。そのうち没年の知られる者で最も後世に命存えた者として挙げるべきはやはり公任その人であろうか。因みに『麗藻』所収詩人の没年（括弧内の上は没した月、下は享年）を掲げてみると次頁の表のようになる。猶、没年不明の有力な詩人に、例えば源孝道・藤原為時・善滋為政らがいるが、孝道は寛弘七年三月以前には没しており、為時は長和五年四月出家し、寛仁二年以後消息定かならず程なく逝去したと思われ、為政も長元年間には没したのではあるまいか。¹⁹⁾従って、公任の死は一条朝及び道長時代の餘燼が尽きたことを象徴するかのようになって思われてならない。が、同時にそれは次代の『本朝無題詩』所収詩人達——院政期の漢詩世界——への転換期にも当たつてもいたようである。

『無題詩』詩人の中でも、年長組（時代的に早い人物）と言えば、藤原明衡（九八九？—一〇六六）・藤原実範（？—一〇二三—一〇六二？）・藤原実綱（一〇一二—一〇八二）・大江佐国（一〇一二？—一〇八六—？）・源経信（一〇一六—一〇九七）・惟宗孝言（一〇一五？—一〇九七—？）らということになろうか。彼らはいずれも公任の死を過去の知識としてではなく、自身の人生の中の事実の一齣として記憶に留めえた世代であるはずだが、かの巨星の永逝を耳にして果たしてどのような感慨を催したことであろうか。当時の彼らの消息を少し判明する範囲で記すとすれば……明衡は恐らく左衛門尉で五十歳を越えているが、再び省試の愁訴を画策して事態を混乱させていたことが知られている。²⁰⁾また、佐国・孝言はまだ文章生で、孝言は公任没年の十一月に『懷風藻』を筆写してい

〈没年一覽表〉

一〇〇九(寛弘六)年	源 則忠(6月・61歳)
	貝平親王(7月・46歳)
	菅原輔正(12月・85歳)
一〇一〇(〃七)年	藤原伊周(正月・37歳)
	大江以言(7月・56歳)
一〇一一(〃八)年	一条天皇(6月・32歳)
	藤原有国(7月・69歳)
	源 為憲(8月・61歳?)
一〇一二(〃九)年	大江匡衡(7月・61歳)
	藤原孝道(7月・8月?)
一〇一三(長和二)年	藤原忠輔(6月・70歳)
一〇一四(〃三)年	高階積善(8月?・?)
一〇一七(〃六)年	菅原宣義(4月・?)
一〇一七(長和六)年	源 憲定(6月・?)
	橘 為義(???)
一〇一九(寛仁三)年	源 道濟(???)
一〇二〇(〃四)年	源 頼定(6月・44歳)
一〇二一(〃五)年	藤原輔尹(???)
一〇二七(万寿四)年	源 俊賢(6月・69歳)
	藤原道長(12月・62歳)
	藤原行成(12月・56歳)
一〇二八(〃五)年	藤原広業(4月・52歳)
一〇二九(長元二)年	大江通直(5月・77歳?)
一〇三五(〃八)年	藤原齊信(3月・69歳)
一〇四一(長久二)年	藤原公任(正月・76歳)
一〇四六(永承元)年	大江挙周(6月・?)

る記録がある。⁽²¹⁾ 実綱は三十歳で従五位上右衛門権佐、経信も二十六歳で正五位下少納言であるから、壮年の官僚として活躍し始めた頃であったかと思われる。⁽²²⁾ このうち、公任との関わりに限って最もよく知られている人物と言え、恐らく誰しも経信を思い浮べよう。

^(道長) 御堂関白大井川にて遊覧の時、詩歌の船を分て各堪能の人々をのせられけるに、四条大納言^(公任)に仰られて云、いづれの舟にかのらるべきや。公任卿云、和歌の舟に乗るべしとてのられけり。さてよめる。朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき。後にいはれけるは、いづれの舟にのるべきぞと仰られしこそ心をこりせられしか。又詩の舟に乗て、是ほどの詩を作りたらしかば、名はあげてましと後悔せられけり。此歌花山院拾遺集を選ばせたまふ時、紅葉の衣とかへて入べきよし仰られけるを、大納言しかるべからざるよし申されければ、本のまゝに入にけり。又円融院御時、大井川逍遙のとき三舟に乗ともあり。

帥民部卿経信卿、又此人におとらざりけり。白河院西川に行幸時、詩歌管絃の三の舟を浮べて、其道々の人々を分ちてのせられけるに、経信卿遅参の間、ことの外に御気色あしかりける程に、とばかりまたれて参りたりけるが、三事兼たる人にて、汀にひざまづきて、や、どの舟にもまれよせ候へといはれたりける。時に取ていみじかりけり。かくいはん料に遅参せられけるにこそ。さて管絃の舟に乗て、詩歌を献ぜられたりけり。三の舟に乗とは是なり。

〔十訓抄〕第十「可^レ庶^二幾才能^一事」

⁽²³⁾ 指摘されるようにこの経信の逸話が承保三年（一〇七六）十月二十四日に行われた行幸の折の事実譚であるかどうかは猶不明ではあるものの——この話柄は『東斎随筆』（興遊類）『古今著聞集』（卷五・和歌第六）などを経、近世でも広く展開して人口に膾炙する——⁽²⁴⁾ 文中に伺えるように経信が公任を強く意識していたその象徴性迄は否定できないのではあるまいか。

だが、その経信とて一条朝の文運隆盛を実感として受けとめえたかどうか。この当時、一条朝を強く追慕し、憧

懐の念を抱いていた人物と云えば、後年『本朝文粹』（公任撰『和漢朗詠集』とも密接な関係があることはよく知られている）を編し、文章博士・東宮学士となつて、文壇における藤原式家全盛時代の地歩を固めた明衡その人に他ならない。彼は自らの文中に次のように記している。

一条院の御宇の間、諸道盛んに興り、六籍遍く弘まれるも、彼の時の文士、皆以て早世しき。其の旧風に習ひたる者は、明衡独り遺れるのみ。⁽²⁵⁾

寛弘元年に文章院に入り、長和三年学問料を支給され、一条聖代に起家出身ながら紀伝道世界を歩み始めた彼の矜持の程が偲ばれる。その背景には、彼の父敦信が『本朝麗藻』詩人の一人であり、当時の才子源為憲・孝道・藤原為時・挙道・輔尹らと肩を比べる存在であつたから、その交遊等の餘塵を受け、文人達の活躍により敏感に明衡も反応し、感化を受けたであらうことも臆測されよう。

以下、院政期の漢詩世界——それは『本朝無題詩』の時代でもある——を概説するに当たり、明衡を起点に記述することから始めたい。

(未完)

〔注〕

(1) 「天晴、未明参^レ督殿。即被^レ向^レ長谷。予候^レ御車後、巳時参着。中納言被^レ謁談入道大納言入滅作法。煩^レ瘡湿、十日許滅亡由也。元日午時入滅給云」(『春記』長久二年二月十九日)。

(2) 「入道前大納言公任薨。年七十六。先是出家、多年住^レ解脱寺^{念仏}」(『扶桑略記』長久二年正月一日)。

(3) 「我朝起^レ於弘仁承和、盛^レ於貞観延喜、中^レ興於承平天曆、再^レ昌^レ於長保寛弘」(大江匡房「詩境記」『朝野群載』卷三)は一例。

(4) 私に訓読(原漢文)。「主上寛仁之君、天曆以後好文賢皇也。万機餘閑、只廻^レ叡慮。所^レ期澄清也、所^レ庶幾^レ者、漢文帝唐太宗之旧跡也」。

(5) 「倫見^レ御製^有感自以次^{本韻}」(『本朝麗藻』卷下・103)詩に依る。「漢文帝」「唐太宗」と『権記』に見えた表現

と重ねて考えられよう。

(6) 「奉_レ読_下重押_上情字_上御製_上不堪_上扑舞_上敬押_上本韻_上」(『本朝麗藻』卷下・105) 詩に依る。

(7) 私に訓読(原漢文)。関連箇所を含め、恵まれた人材を列挙しているのも注目されるので補足して提示する。「御宇廿五年間。叡哲欽明、広長_三万事。才学文章、詞花過_レ人、糸竹絃歌、音曲絶倫。年始十一、幸_三於_二円融院_一。自吹_三竜笛_一以備_三宸遊_一。佳句既多、悉在_三人口_一。時之得_レ人也、於_二斯為_レ盛。親王則後中書王(具平)。上宰則左相(道長)。儀同三司(伊周)。九卿則左大丞(源)扶義・平維言惟仲・霜台相公(有国)等之輩、朝抗_三議廊廟_一、夕預_三参風月_一。雲客則(藤原)実成・(源)頼定・相方・明理。管絃則(源)道方・濟政・時中・(藤原)高遠・(源)信明・信義。文士則(大江)匡衡・以言・(紀)齐名・(菅原)宣義・(高階)積善・(源)為憲・(藤原)為時・(源)孝道・(高丘)相如・(源)道濟。和歌則(藤原)道信・実方・長能・(大中臣)輔親・(和泉)式部・(赤染)衛門・曾祢好忠。画工則巨勢弘高。舞人則大伴兼時・秦身高・多良茂・同政方。異能則私宗平・三宅時弘・伊勢多世・越智経世・公侯恒則・参春時正・真上勝岡・大井光遠・秦経正。近衛則下野重行・尾張兼時・播摩保信・物部武文・尾張兼国・下野公時。陰陽則賀茂光榮・安倍(倍)晴明。有驗之僧則観修・勝算・深覚。真言則寛朝・慶円。能説之師則清範・静照・院源・覚縁。学徳則源信・覚運・実因・慶祚・安海・清仲。医方則丹波重雅・和氣正世。明法則(惟宗)允亮・允正。明経則(清原)善澄・広澄。武士則(源)満仲・満正・(平)維衡・致頼・(源)頼光。皆是天下之一物也(下略)」。猶、その御代は「上達部殿上人道々の博士、たけき武士まで、世にありがたき人のみ多く侍りける」(『今鏡』昔語第九・唐歌)と評され、一条帝自身も「我、人を得たる事、延喜天曆に越えたり」(『十訓抄』第一)と自賛したと伝えられている。

(8) 『本朝一人一首』(巻五・217)では「程」に作る。第一句を踏み落とさず押韻(下平声八唐韻)するのが本来正しいと考えて改めたものだろう。実は「裡」と「程」は殊に異体字を介在させると頗る近似する字形となる。従って『一人一首』の本文は極めて蓋然性が高いと思うが、とりあえず「裡」に従っておく。猶、本詩の句題は『白氏文集』(巻六九)「閑坐看書貽_三諸少年_一」詩中に「書中見_三往事_一」(隆家)とあるのに依るだろう。

(9) 「参_三左府_一、供_三奉宇治_一」。御供左右衛門督・権中納言・弼宰相・宰相中将・殿上人及諸大夫、作文和歌管絃者之外無_三他人_一。作文序弼相公。題晴後山川清。探題、以言献_レ之」(『権記』長保五年五月二十七日)「午刻読_三作文_一、自舟上洛、入_レ夜著_レ家」(同上、五月二十八日)などある。『本朝麗藻』(巻下・58)には他に善滋為政の作が見え、『類題古詩』(339)には大江以言の摘句も残る。

(10) 「平安朝句題詩考」(『王朝漢文学表現論考』平成十四年・和泉書院)。猶、佐藤道生「詩序と句題詩」「句題詩詠法の確立―日本漢学史上の菅原文時」(『平安後期日本漢文学の研究』平成十五年・笠間書院)は詳しく論じて行届いた論である。

(11) この作品は句題ではなく賦物題(猶、句題詠の源は賦物詠にある)。「春雨の花の枝より流れ来ばなほこそぬれめ香もや移ると」(『後撰集』110藤原敏行)などの桜花雨中詠に継承されるか(白詩にも雨中花詠は見えている)。

(12) 第七句の自注に「祇陪東閣。三十年強」とある。東閣は当然「漢相東閣」(『蒙求』)をふまえているであろうから、藤原基経家に忠臣自身が入りするようになって三十年以上が過ぎていることになり、自分の老境とこの老桜をだぶらせていると見て良いのではなからうか。

(13) 「千早ぶる神世もきかず竜田川から紅に水く、るとは」(『古今集』294在原業平)という類の表現に通う(但し、業平歌の「から紅」は紅葉であって桜花ではない)。

(14) 例えば、詠物詩などは現前の状と想像の状とを併せ述べるものであった(網祐次「永明文学」『中国中世文学研究―南斉永明時代を中心として―』昭和三十五年・新樹社)。

(15) 例えば「三輔決録曰。蔣詡字元卿、舍中竹下開三逕。唯羊仲・求仲從之遊。二仲□性廉逃名」(『蒙求古鈔本』)「蔣詡性廉ニシテ家ノ貧シキ事ヲウレヘズ、世ヲバ知ル心ナクシテシツカニ日ヲ送りケリ。羊仲求仲ト云二人ノ友ノミゾ、同ジ心ニ世ノ交ハリヲ好マズシテ、トモナヒ遊ビケルニ、ソノホトリニ竹ヲ植ヘテ竹ノモトニハツカニ三ノ逕ゾアリケル。三逕ト云ルハ門ノミチ井ノミチ廁ノミチ也。三逕ハ車井廁ノミチトモ云ヘリ」(『蒙求和歌』)とあって、隠遁者の庭園の小道と知れるが、月との関わりはない。

(16) この白詩句は「千載佳句」(巻下・隣家568)『和漢朗詠集』(巻下・隣家572)にも所収される。因みに「月のよい晩はあの蔣元卿が二人の友人と相談しんだように三徑を徘徊して月を眺めよう。青柳が芽を出す春はあの陸慧暁と張融のように両家とともに賞でることしよう」(新潮社古典集成『和漢朗詠集』昭和五十八年)と訳されている。

(17) 拙稿「九月十三夜の月―その詩歌素材としての定着と表現をめぐって―」(富山女子短期大学国語国文学会『秋桜』七号、平成二年三月)参照。

(18) 『二中歴』(第十二・詩人歴・詩作者)には「本朝麗草、三十四人」とあるが、現存本には欠落があるため二十九人の作(詩一五〇首、詩序十三篇(うち九篇が『本朝文粹』に採られる))が見えるのみ。但し、そのうちの藤原為時・

広業の二人は、実は先の「三十四人」の中には含まれていない名である。猶、本朝麗藻を読む会・川口久雄『本朝麗藻簡注』（平成五年・勉誠社）参照（柳澤良一氏による「作者一覧」、川口博士の解説「本朝麗藻と源氏物語」が収録されている）。

(19) 公任没後の生存者は大江拳周（匡衡と赤染衛門の子）・大江時棟らほんのわずかと思われる。

(20) 大曾根章介「藤原明衡の生涯」（『王朝漢文学論攷』平成六年・岩波書店）参照。

(21) 『懷風藻』諸本の奥書に「長久二年冬十一月二十八日、燈下書之。古人三餘、今已得三者也。文章生惟宗孝言」と見える（日本古典文学大系69『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』昭和三十九年・岩波書店）。

(22) 猶、実範については詳しいことは不明（長元二年には藏人式部丞であり、天喜元年（一〇五三）に文章博士となつたことが知られるくらいか）。

(23) 「行幸大井河」。御鷹逍遙也。公卿侍臣等皆以供奉。右大臣源朝臣師房述「和歌序」。出居式部卿敦賢親王参於御船。列「大臣座之上」。但馬守源高房於「桂河梅津辺」作「御在処」矣。（『扶桑略記』承保三年十月二十四日）「行幸大井河」。有「和歌」。右大臣^{師房}献序」（『百練抄』承保三年十月二十四日）とのみ見えるものが、『続本朝通鑑』（卷第三十四・白河天皇上・承保三年冬十月条）では「天皇遊「獵嵯峨野」。幸于大井河。関白藤師実右大臣源師房内大臣藤信長以下百僚奉從焉。連「詩歌管絃之三船」。各隨其所「長駕」之。以添「御遊之興」。中納言源經信乗「管絃之船」。且作「詩献」歌。天皇賞「其兼三能」。殊勅「右大臣」作「倭歌序」曰（以下『続文粹』卷十所収「初冬扈從行幸遊「覽大井河」」應製和歌序」（師房作）の引用）」と經信三船故事譚を語るものになっている。

(24) 例えば『本朝一人一首』（卷六・262）『史館茗話』（83話）『本朝蒙求』（卷中・經信多芸）『本朝世説』（卷下・品藻、巧芸）『桑華蒙求』（卷上・經信多芸）『本朝語園』（卷三・108 109話）『大東世語』（卷二・文学）『扶桑蒙求』（卷中・經信三舟）『大日本史』（卷一四一・列伝六八）『百人一首一夕話』（卷五、六）『皇都午睡』（初編下の卷）など。

(25) 私に訓読（原漢文）。「一条院御宇之間。諸道盛興。六籍遍弘。彼時文士。皆以早世。習其旧風者。明衡独遺」（『請殊蒙「鴻恩」依「先父敦信殿下侍読功明衡献策并式部少輔勞被叙一階」状』『続文粹』卷六）。この秦状は最晩年の治歴二年（一〇六六）の作と考えられる（注20所引大曾根論文参照）。

(26) 「又被」命云、輔尹拳直一雙者也。匡衡送「書於行成大納言許」云、為憲為時孝道敦信、拳直輔尹、此六人者越於凡位者也。故其身貧云」（『江談抄』第五・46「輔尹拳直一雙者也事」）。猶、敦信には、秀才藤原国成と文事を語つてその

才に賛嘆し、自分の息子（明衡）もこんな風であつたらと漏らしたこともあつたと伝えられている（同上書・72「秀才
国成来」談敦信亭「事」）。この説話は道長の父兼家が若き公任の才学を羨んだ逸話にも重なるだろうか。